



『勢語通』伝本考

著者	田中 まき
著者別名	TANAKA Maki
雑誌名	文林
巻	45
ページ	1-34
発行年	2011-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001589



『勢語通』 伝本考

田 中 ま き

『勢語通』 伝本考

『勢語通』は江戸時代、五井蘭洲によって著された『伊勢物語』注釈書である。五井蘭洲は江戸時代中期の儒学者で、名は純楨、字は子祥。蘭州は号で、冽庵、梅塢とも号した。¹⁾元禄一〇年(二六九七)、大坂の町人で朱子学者であった五井持軒の三男に生まれた。幼少期は貧しく、信州などの親戚に預けられ、十五歳で大坂に戻り、苦学しつつ生計を助けたという。二十歳の時に京都・古義堂の伊藤東涯に入門。その後、大坂の懐徳堂の中井斡庵と知り合い、享保十一年(一七二六)、懐徳堂の助教となる。懐徳堂は大坂の豪商たちが出資設立した私塾で、四書五経を中心とした漢学が講ぜられ、明治維新まで一五〇年近く続いた学問所であった。蘭州が招かれた年に、幕府から公認され、官許学問所となっていた。蘭州はその後、江戸に赴き、津軽藩の儒官を務めた時期もあるが、元文四年(一七三九)帰坂して、再び懐徳堂に戻り、以後、斡庵を補佐して、この時期の懐徳堂の教育の中心を担った。著作には『非伊編』

文林 四十五号

『非物編』『承聖編』『中庸首章解』などの朱子学に関するもののほか、『勢語通』『古今通』『万葉集註』『源語提要』『源語註』などの和学に関する注釈も著した。晩年、中風を患い、宝暦十二年（一七六二）、六十六歳で没した。

蘭洲の和学への興味関心はそもそも父の影響があったようで、蘭洲の父、持軒は歌人の下河辺長流の門人であった。また、蘭洲は江戸にいた時、陽明学者で和歌にも造詣の深かった三輪執斎と親交を深めていた。そのようなことから、蘭洲は儒学一辺倒ではなく、和学にも通じた学者だったようだ。

本稿では、この漢学者でありながら、和学にも通じていた五井蘭洲の『伊勢物語』注釈書『勢語通』について、特にその伝本の調査を通して、その改稿の実態を明らかにし、蘭洲の『伊勢物語』注釈に対する姿勢を解明したい。

二

『勢語通』の注釈の特徴や蘭洲の見解に対する分析については、既に八木毅氏^②によって詳述されているが、『勢語通』の最大の特徴は、『伊勢物語』の章段の並びを、「初冠」から始まる通常の順序ではなく、異なる並べ方に変更して、『伊勢物語』を再構成している点にある。この点において、この書はほかに例を見ない極めて特異な注釈書である。そこで先ず、この最も重要な特徴について確認しておこう。

蘭洲は『勢語通』の序文に次のように述べる。^③

闕疑抄の一説にいへらく、七条后温子に、伊勢が書て参らせたるといふ。伊勢は、七条后にさむらひたる者なり。業平のことをよく知たる者なり。業平の自身かきたるものあるをもちて、其内に言葉をくはへ、作りものがたり

『勢語通』伝本考

として、まひらせたと心得べきなり。

細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』の一説として、『伊勢物語』は在原業平自身が書いたものをもとに、伊勢が書き加えた物語だとする説を紹介し、蘭洲自身もこれに賛意を示して、さらに続ける。

まづ発端よりはじめて、第一百二段、昔男やもめにてゐてといへるまでは、中将の心ありてかける自記なるべし。それを伊勢が清書するとき、少しづゝかき改ため、又詞をくはへ、又中将のことにもあらぬことをものせ、又誰ともしらぬ女の歌をものせたり。仁和のみかど、いふより、おくまでは、伊勢が聞伝へたるまゝに、追加をせらるらん。これを、世にしらせんとて、中将の没後、光孝天皇の年号をもて書出せり。終りに、中将の臨終の歌をのせたるにて、自記にあらざる証を見るべし。中将の自記ももとより、外の人の書るやうにいひなしたり。又伊勢より後のことのあるは、後人この書を註せし詞の、たま／＼本文にまじりたるなり。

「第一百二段、昔男やもめにてゐて」とあるのは、定家本などの普通本系統の『伊勢物語』では第一百二段のことで、ここまでが業平の自記だろうとし、それらを伊勢が書き改め、ことばを加えたとする。また「仁和のみかど」の章段（第百十四段）から最終の「臨終」の章段（第百二十五段）までは、聞き伝えるままに、伊勢が追加したものでしょうという。また、ところどころに伊勢より後の時代のことが書かれているのは、後人が注したことが交じっているからだとする。

さらに、蘭洲は「男女のあるまじきみそかごとを書しは、おほくは作りこしらへたることにて、実事にあらず」とし、次のように続ける。

非礼不義のことありとて、すてゝよまざらんも、さうくしければ、今その実事のみをぬき出して、古人の注を用ひ、又みづからの見をくはへ、内の巻と名づけ、我家のいせものがたりとし、ひとつ子のむすめによましむ。中将の、時をうれひ、世をいきどふるころをあきらかにし、色ごのみといふ名をすゝがんことをねがふのみ。あとに残れるは、実事にあらねば、とる所なけれど、言づかひのふるくおもしろく、又あるべき文にもあらず。されど、註者のとき得ざる所も有と見ゆるゆへ、これも一卷とし、外の巻と名づけて、おろく其注をほどこし待る。

『伊勢物語』には「非礼不義」のことが書いてあるが、業平の「時をうれひ、世をいきどふる」、つまり慨世憂国の思いが現れているとし、業平の「色好み」の汚名を雪ぐことを願って、『伊勢物語』の中から、業平の実事だけを抜き出し、古人の注に自らの見解を加えて「内の巻」とし、我が家の『伊勢物語』として、一人娘に読ませるとする。それ以外は、業平の実事ではないので、特にすぐれた点もないが、これまでの注釈者が解明できないところがあるゆえ、「外の巻」と名付けて、不十分なながらも自分がその注を施すという。

こうして、蘭洲は『伊勢物語』を普通の本にあるように「初冠」の第一段から並べるのではなく、その内容を分析して、業平の実事に当たる章段を内の巻に、実事ではなく、作られた章段を外巻に分けて、再構成しているのである。^⑤内の巻に収められたものを、普通本系統の章段番号で挙げると、最初に、長岡の母とのやり取りが描かれる「老ぬればさらぬ別れの」の歌の第八十四段が置かれ、以下、八十三、四十一、四十六、四十九と置かれる。その後は、とびとびではあるが、『伊勢物語』の順番通りに、七、九、十一、十六、十七、二十九、三十三、三十八、三十九、

『勢語通』伝本考

四十四、四十八、五十一、五十二、五十六、五十九、六十六、六十八、七十六、八十二、八十五、八十七、八十八、九十一、九十七、九十八、百一、百二、百四、百六、百九、百十四、百十六、百十七、百二十四、百二十五段が並べられ、合計四十七章段を内の巻に入れる。外の巻はこれ以外の章段であり、一、六、十、十二、十五……というように続き、百二十三段で終わる。このように『勢語通』は、ほかのいずれの注釈書も試みなかった『伊勢物語』の再構成を行っていることが最大の特徴である。

三

『勢語通』の蘭洲自筆稿本が懐徳堂に残っており、これが明治四十四年（一九一三）、「懐徳堂遺書」と題する叢書の中の一書として翻刻、刊行されている。⁶⁾ただしこの翻刻では、底本の行間や欄外に書き入れられた傍注や頭注などのほとんどが省かれている。

そこで本稿では、この自筆稿本を改めて調査し、また、そのほかの主だった『勢語通』の写本についても分析して、それぞれの写本の性格を明らかにしたい。

『勢語通』の伝本は、それほど多く伝わっていないが、大津有一氏の『伊勢物語古注釈の研究』⁷⁾には、懐徳堂蔵本・上野図書館蔵本・刈谷図書館蔵本・吉永登氏蔵本の四本が挙がる。このうち、懐徳堂蔵本は、戦災による焼失を免れた懐徳堂の蔵書三万六千点とともに、昭和二十四年（一九四九）、大阪大学に寄贈され、現在、大阪大学附属図書館の所蔵となっている。上野図書館蔵本は現在の国会図書館蔵本のことと、これについても後ほど詳述する。刈谷図書

文林 四十五号

館蔵本・吉永登氏蔵本については、国文学研究資料館のマイクロフィルムによって確認したところ、懐徳堂旧蔵本に近い写本ということが確認できた。このほかに、国文学研究資料館にマイクロフィルムで収蔵されている写本に、大阪天満宮蔵本が見えるが、これは外の巻のみで、内の巻を欠いた本である。

これらの伝本のうち、ここでは、①懐徳堂旧蔵本と②（上野図書館旧蔵）国会図書館蔵本、さらに、これに加えて、片桐洋一氏所蔵本の三本について調査した結果を報告し、『勢語通』の改稿の様相を考察したい。^⑧まずそれぞれの本の書誌などの情報を掲げる。

①懐徳堂旧蔵本（以下、懐徳堂本と略称する）大坂大学附属図書館所蔵

縦三十 cm、横二十 cm。袋綴。四冊。

内卷上32丁（うち序3丁）、内卷下29丁、外卷上52丁、外卷下20丁、全133丁。

外題（題簽）「勢語通^{内卷上}」、「勢語通^{内卷下}」、「勢語通^{外卷上}」、「勢語通^{外卷下}」

内題 「伊勢ものかたり内の巻の上 通第一」、「伊勢ものかたり内の巻の下 通第二」、「伊勢ものかたり外の

卷上 通第三」、「伊勢ものかたり外の巻下 通第四」

内卷・外卷の初めに序あり（ただし、外の巻の序は表紙裏の見返しに貼る）。

五井蘭洲の自筆稿本。摺り消し、貼り紙、継ぎ紙などによる補訂が多数見られる。

物語本文は行間を空けて少し大きな字で書き、注は行間を詰めて小さく書く。

②国会図書館蔵本（以下、国会本と略称する）

『勢語通』伝本考

縦二十七cm、横十九・五cm。袋綴。三冊。

内巻47丁（うち序3丁）、外の巻上44丁、外の巻下17丁、全108丁。

外題（打付書）「五井蘭洲先生真筆／伊勢物語内巻」、「五井蘭洲先生真書／伊勢物語外の巻上」、「五井蘭洲先生真

筆／伊勢物語外の巻下」

内題 「伊勢物語内巻」、「伊勢ものかたり外の巻上」、「伊勢ものがたり外の巻下」

内巻の初めに序あり。外の巻には序なし。

外題に「五井蘭洲先生真筆」と記されている通り、字体から見ても、蘭洲自筆本と見られる。

③片桐洋一氏蔵本（以下、片桐本と略称する）

縦二七・二cm、横一九・六cm。袋綴。二冊。

内巻53丁（うち序4丁）、外巻74丁、全127丁。なお、内巻に、差し替えの元の二丁の別紙が挟まれて存在する。

外題（題簽）「伊勢物語内の巻 五井蘭洲著真筆」、「伊勢物語外の巻 上下」

内題 「伊勢物語内の巻の上」、「伊勢物語外の巻上」、「伊勢物語外の巻下」

内巻・外巻の初めに序あり（ただし、外巻の序は表紙裏の見返しに貼る）。

一面十一行。物語本文も注も原則として字の大きさはほぼ同じ。

では、次に、これらの本がどのような関係にあるのか、具体的に確認していこう。まず、内巻の冒頭にある序を比

文林 四十五号

較してみよう。

懷徳堂本

又伊勢より後のことのあるは、後人この書を註せし詞の、たま／＼本文にまじりたるなり。男女のあるまじきみそかごとを書しは、おほくは作りこしらへたることにて、実事にあらず。歌あるより、ものがたりを作ること、その例おほし。人の女をぬすみ、人の妻にかよふなど、見やうときやうもあるべけれど、先耳をけがすことなり。しかるに、女もじにかけるゆへ、いつよりか、婦人女子のもてあそぶべき物のやうになり来れり。

国会本

又伊勢が清書し、又かき加へて奉れるより、やがて伊勢物語と名づけたるなり。又この内に伊せより後の事のあるは、後人この物語を註せし詞の、たま／＼本文にまじりたる也。この書の内、男女淫奔のことを書しは、おほく作りたることにて、実事にはあらず。たとひ実事なり共、今考へ有りて益なきことなり。其外のこととは皆実ある事とみえたり。その男女のことをいへるに、ときやうも見やうも有べけれど、人の女をぬすみ、人の妻に通ずるなど、きくも耳をけがす事なり。されど、女もじにかけるゆへ、かならず婦女子のもてあそぶべき物のやうになり来れり。両者ともに蘭洲の自筆と見られるが、ゴシック体で異同を示したように両者にはかなり本文の違いがある。例えば、国会本は『伊勢物語』の題号の由来を、伊勢が清書し、書き加えたからとするが、その記述が懷徳堂本にはない。そのほかに、種々、細かい違いがある。懷徳堂本が稿本であることを思えば、懷徳堂本が改訂後の本文と思われるが、注釈の量は国会本の方が多いので、果たしてそういえるかどうか、確認の必要があろう。

『勢語通』伝本考

そこで、これを確認するために、注目すべき本がある。それが片桐本である。写真①の一丁裏四行目中央から二丁表一行目上までが、右の頁に掲げた箇所に対応するが、文字の上に朱で線が引かれたり、横に書き入れられたりして、訂正されている。

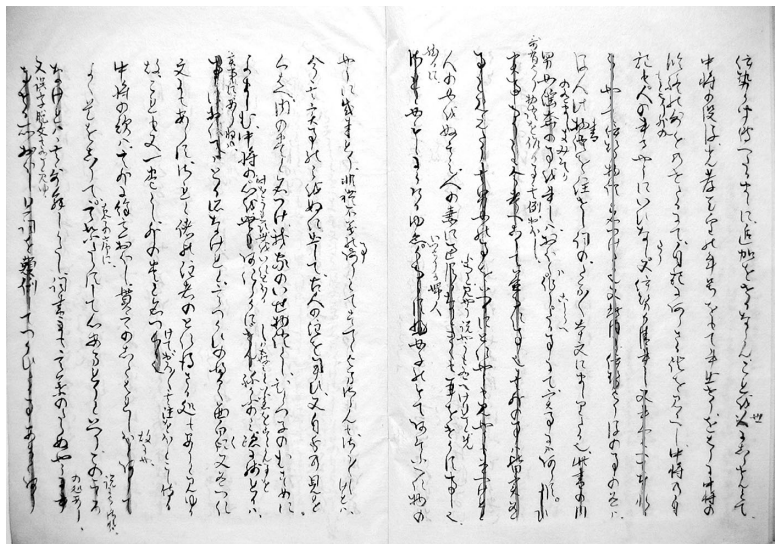
この訂正前の元の本文と訂正後の本文を、懷徳堂と国会本に照らすと、訂正前の本文が国会本と一致し、訂正後の本文が懷徳堂本と一致する。このことは、やはり国会本が先行し、懷徳堂本のように改められたことを示していよう。

次にもう一箇所、章段の注釈を引いて確認しておこう。⁽⁹⁾

第四十一段（内巻上、四十一）⁽¹⁰⁾

国会本

兄弟をいふ。^{兄弟をいふ。} ひとりのおぢめは ^{ひとりのおぢめは} まつしきを夫にもてる也。^{まつしきを夫にもてる也。}
むかし、女はらから有けり。ひとりはいやしき男のまつし ^{ひとりのおぢめはくらのあるれきくなり。}
き、ひとりはおてなる男もたりけり。いやしき男もたる、 ^{もたるをんな}
しはすのつごもりに、おもてのきぬあらひて、手づからは ^{まつしければ也。}
りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざもなら ^{せいをいだしければ也。}



2丁オ

写真①

1丁ウ

はざりければ、うへのきぬのかたをはりやりてけり。せんかたもなく、たゞなきに泣けり。これをあてなる男聞て、いと心ぐるしかりければ、いとよらなる、ろうさうのうへのきぬを、見出て、やるとて、

うへのきぬは、うへにきるものにて、かりぎぬなど也。ろうさうは緑衫と書て、青きひとへのきぬ也。六位の人の衣なり。

片桐本

むかし、女はらから有けり。ひとりはいやしき男のまづしき、ひとりはあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、

はざりければ、うへのきぬのかたをはりやぶる也。やりてけり。せんかたもなく、たゞなきに泣けり。これをあてなる男聞て、いと心ぐるしかりければ、いとよらなる、ろうさうのうへのきぬを、見出て、やるとて、

うへのきぬは、うへにきるものにて、かりぎぬなど也。ろうさうは緑衫とかきて、青きひとへのきぬ也。六位の人の衣也。

懐徳堂本

昔、女はらから有けり。ひとりはいやしき男のまづしき、ひとりは、あてなる男もたりけり。いやしき男もたる、

しはすの晦に、表のきぬあらひて、手づからはりけり。ころろざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならばざりければ、表のきぬのかたを、はりやりてけり。せんかたもなく、たゞなきに泣けり。これをあてなる男聞て、いと心ぐるしかりければ、いとよらなる、ろうさうのうへのきぬを、見出て、やるとて、

『勢語通』伝本考

貧賤なる男を、むこにとられたるは、有常のおちぶれての後のことにやあらん。あてとは、あてやかともいふ、位たかき人をいふ。中将は高位といふべきにもあらねど、貧賤に対しては、あてなる人なり。表のきぬは、上にする衣なり。かりぎぬの類なるべし。有つねのさかえし時の、むすめなれば、きぬをあらひはることは、し習はざりしなり。ろうさうは、緑衫とかけり。青きひとへの衣なり。六位の人の服色なり。

三本のいずれかと異同のあるところをゴシック体で示したが、片桐本の訂正前の元本文と国会本がほぼ一致し、片桐本の訂正後の本文と懷徳堂本がほぼ一致する。

ここでもやはり片桐本の訂正前の元本文と国会本が『勢語通』の古い稿の写しであり、片桐本の訂正後の本文と懷徳堂本は改稿が進んでいるものと見られるのである。

そこで、さらに三本を詳しく分析して、それぞれの本の性格をより明確にしよう。

懷徳堂本は、前にも触れたように、この写本を実際に見てみると、あちらこちらに貼り紙や継ぎ紙、また摺り消しの跡が多数見られ、蘭洲が繰り返し、補足したり訂正したりしていたことが窺える。『伊勢物語』本文の書き損じの訂正というような単純ミスを直したものもあるが、注釈を改めた跡が認められるところも多数ある。次にその例を掲げてみよう。第一段の「かひまみ」の注釈の箇所である。

文林 四十五号

第一段（外巻上、一）

懐徳堂本

かひまみ、かひは間也。両山の間を、山のかひといふに同じ。まみは、目見なり。物のあひだより見たるなり。文
字しりたる人の、なまじひに、垣間見の文字を用るにより、垣のひまよりのぞきたるやうにとくは、いと俗なり。

網掛けにした箇所は、摺り消した跡が認められる箇所であるが、この箇所が国会本と片桐本では次のようにある。

国会本

かひまみ、かひは間也。両山の間を、山のかひといふにおなじ。まみは目見なり。物のあひだより見たる也。文
盲なる人の、なまじひに垣間見の文字を用るにより、垣のひまより、のぞきたるやうにとくは、いと俗也。

片桐本

かひまみ、かひは間也。両山の間を、山のかひといふに同じ。まみは目見也。物のあひだより見たる也。文**盲**なる
字しりたる
 人の、なまじひに垣間見の文字を用るより、垣のひまより、のぞきたるやうにとくは、いと俗也。

仮名遣いの違いはさておくと、ゴシック体で掲げた箇所にも異同があることが確認できる。懐徳堂本ではここは摺り消して、「字しりたる」と書き、片桐本では「盲なる」を見せ消ちにして、「字しりたる」を書き入れている。つまりこれは、もともと国会本のように「文盲なる」とあったものを懐徳堂本のように「文字しりたる」と改めたものと見られる。片桐本はやはり蘭洲の改稿を反映して校訂していることが窺えるのである。

次に、懐徳堂本が貼り紙をした訂正箇所も見よう。

『勢語通』伝本考

第八十段（内巻下、七十九）

ぬれつゝぞしめて折つる年の内に春はいくかもあらじと思へば

歌の心、かくをとろへたる家なれど、藤は無情のものとて、花咲たり。是をこのまゝにちらさんは心なし。富貴の家は、別に春あるならひなれば、雨をいとはず、しめて折て奉るとなり。つごもりなるに、春はいくかもあらじといへるは、およそ歌のならひかくのごとし。たゞ花の散ることをいはんとていへるなり。諷刺微妙いふばかりなし。

（空）
（白）

注釈の末尾の（空 白）とした箇所は、書いてあった注を削除したらしく、元の紙を切り抜き、裏から白い紙が貼つてある。この同じ箇所が国会本では次のようにある。

ぬれつゝぞしめて折つる年のうちに春はいくかもあらじとおもへば

かくおとろへたる家なれど、藤は無情のものとて花咲にけり。これを此まゝにちらさんは心なし。富貴の家は、別に春をおくならひなれば、雨をいとはず、しめて折て奉る也。富貴の家にては、花も久しくあらんと也。諷刺微妙、いふばかりなし。かゝる歌をめでずんば、中将のは、あにうれしとおもはれんや。

国会本の末尾には「かゝる歌をめでずんば、中将のは、あにうれしとおもはれんや」の注釈があり、懐徳堂本の貼り紙部分にも、もともとこの記述があったことが窺われる。片桐本はここでは掲げないが、この点、国会本とほとんど同様である。

このように、懐徳堂本には摺り消しや貼り紙で訂正している箇所が多数見られるが、懐徳堂本と国会本・片桐本と

文林 四十五号

の異同は、このような痕跡の残るものばかりではない。右の例でもわかるように、「かゝる歌をめずんば……」以外のゴシック体で示した箇所にも異同が多数ある。貼り紙訂正以前に、国会本・片桐本とは既に異同が生じているといふことである。このことからわかるように、懷徳堂本は、初稿そのままの本に手を入れているのではなく、新しく書き直されていると見られる。蘭洲はその書き直した稿本に、このようにまた手を入れていると考えられるのである。

四

前章で見えてきたように、国会本と片桐本（訂正前の元本文）は同様の注釈内容を持つ箇所が多く、両者は『勢語通』の初期段階の本（おそらく初稿本）の写しだったことが窺えるが、書写の姿勢にはかなり違いがあるようだ。例えば、第九十九段（外巻下、九十八）の末尾は、

国会本

のちはたれとしりにけり。

其名をたれと聞きけり。

片桐本

のちはたれとしりにけり。其名を誰と聞きけり。

懷徳堂本

のちはたれとしりにけり。その名をたれと聞きけり。

『勢語通』伝本考

このように片桐本と懷徳堂本では『伊勢物語』本文の下に注が書かれている。懷徳堂本は、この部分が丁の最終行になっており、そのため、この章段をこの丁に収めてしまおうとして、注を改行せず、本文の下に少し小さめの字で「その名をたれと聞しりけり」と書いたものと見られる。片桐本は丁の変わり目でもないのに、懷徳堂本と同じように、本文の下に少し小さめの字で同様の注を書いている。これは、片桐本が懷徳堂本を忠実に写そうとしたゆえと考えられるのである。つまり片桐本の親本は、蘭洲の初稿段階の懷徳堂本そのものであった可能性が高いように思うのである。

一方、国会本は、本文の次の行に改行して、注を掲げるといふ通常のパターンで書いてある。前にも記した通り、国会本は、蘭洲の自筆と見られる本である。それゆえ、彼自身がこの注を改行して、注としてあるべき位置に書いたものであろう。つまり国会本は『勢語通』の初稿本を蘭洲自らが書き直した清書本であらう。

次の注の掲げ方にも注目したい。第九十五段は「むかし、二条の後に、つかうまつる男有けり」で始まる章段だが、この末尾が懷徳堂本では、次のようになっていいる。

第九十五段（外巻下、九十四）

懷徳堂本

七丁ウ（第九十五段末尾）

この歌にめでゝあひにけり。

△高子は――

文林 四十五号

で囲んだ部分は、裏から紙が貼られて、その上にこの章段の末尾本文「歌にめでゝあひにけり」が書かれ、その左の狭い行間に「△高子は――」と書き込まれている。そして、この本の二丁後の第九十六段末尾に「△」の印が付けられて、次のように書かれている。

九丁ウ（第九十六段末尾）

△高子は、陽成院元慶元年、御即位の時、中宮とならせ給ふ。中将は、元慶四年に、五十六歳にて卒せられれば、高子を后と申奉りてより、わづか三十四年在昔なり。然れば中将の自筆に、二条の后とはあるまじ。たゞ女御とのみぞあるべき。そのうへ、中将の時五十余歳なれば、かゝることあるべきにあらず。この男を、たしかに中将と名をさしていはんは、たしかならず。もとより、二条の后につかふべき中将にもあらず。大原行啓の供せられたるは、その役にて、おほやけよりの命なればなるべし。此注の一段は上の二条の后の下にあるべし。

末尾に「此注の一段は上の二条の后の下にあるべし」と書かれている通り、この「△高子は」以下の注は前の段の「△高子――」の箇所にあるべき注釈がこの箇所に書かれていることがわかる。この部分が国会本では、どのようになっているかという点、第九十五段の末尾に、

この歌にめでゝあひにけり

高子は、陽成院元慶元年、御即位の時、中宮とならせ給ふ。（中 略）大原行啓の供せられたるは、その役にて、おほやけよりの命なればなるべし。

というように、『伊勢物語』本文「この歌にめでゝあひにけり」の隣に、懷徳堂本と同じ内容の注釈が掲げられている。

『勢語通』伝本考

つまり懷徳堂本の指示通りに書き直されているのである。

一方、片桐本は懷徳堂本同様、第九十五段の末尾に、

この歌にめでゝあひにけり。

△高子は――

とし、第九十六段の末尾に、

△高子は、陽成院元慶元年、御即位の時、中宮とならせ給ふ。(中 略) 大原行啓の供せられたるは、

其役にて、おほやけよりの命なればなるべし。 此注の一段は上の二条の下の下に有べし。

というようになっており、懷徳堂本と同様の体裁で書かれている。つまり片桐本は蘭洲の稿本である懷徳堂本をそのまま忠実に写そうとした本と見られるのである。

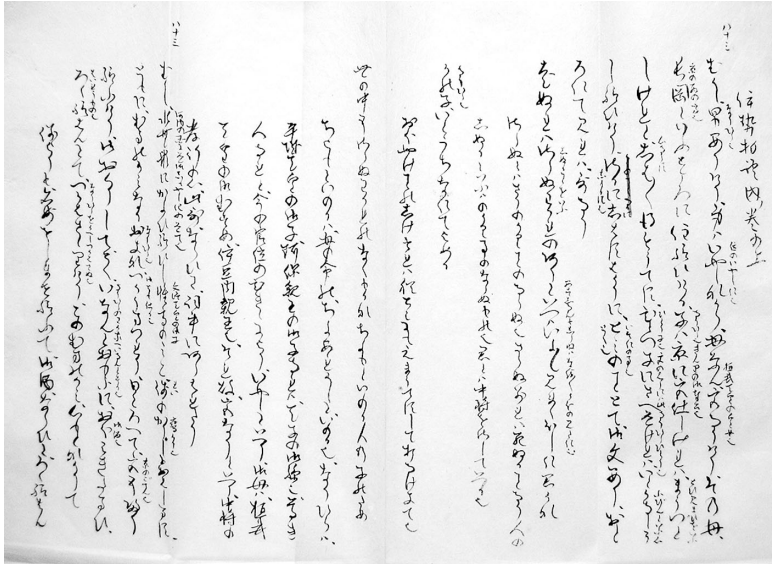
このように蘭洲の稿本を忠実に写したと見られる片桐本であるが、この本には、同筆の、差し替えられた元の紙、二枚が残っていることが注目される。また、これに付いていた付箋だったのか、「此式枚を抜て六枚を入べし」と書かれた紙片も存在する。

この二枚の紙(写真②・③)の初めには、次のようにある。

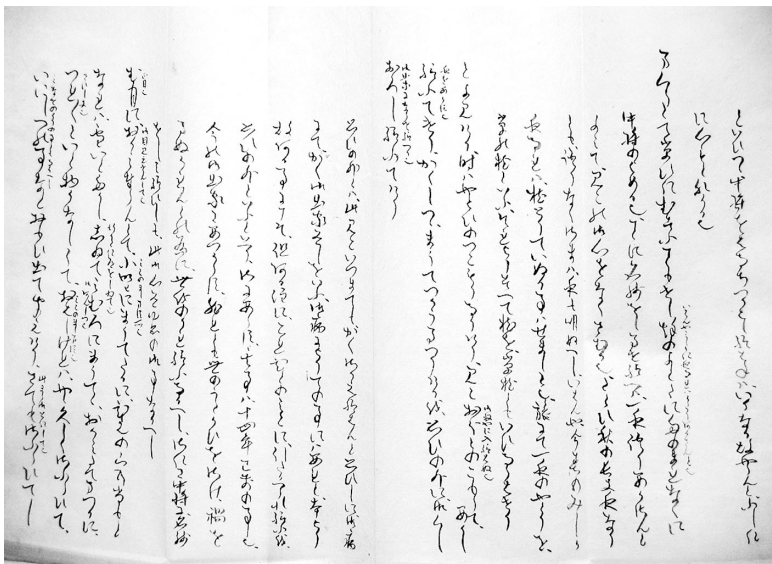
伊勢物語内／卷の上

八十三 むかし、男ありけり。なりひら也。身はいやしな位のいやしき也。ながら、母なん、宮桓武天皇の皇女也。なりけり。……

これは『勢語通』冒頭の序文の次にくる、内の巻の最初の部分で、「八十三」とあるが、『伊勢物語』の普通本系統で



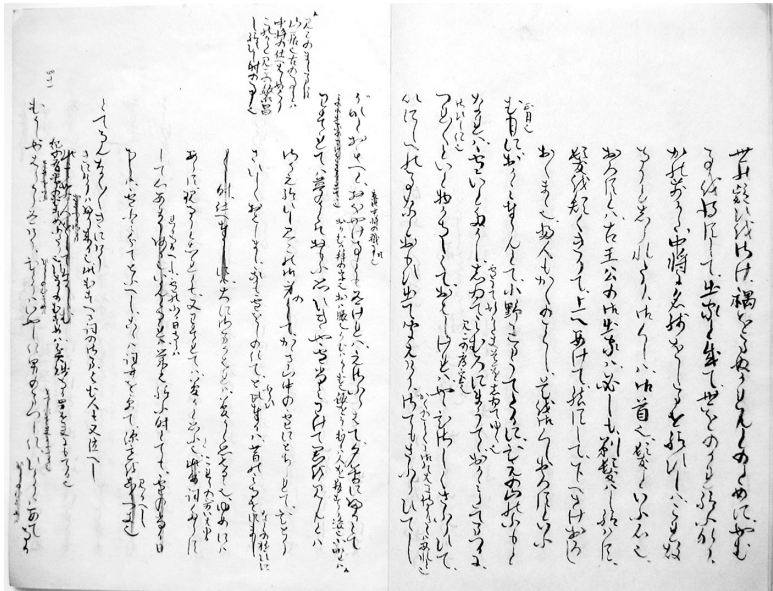
写真② 2枚のうちの1枚目



写真③ 2枚のうちの2枚目

『勢語通』伝本考

は第八十四段に当たる。この段に続き、写真②の後ろから五行目にも「八十三」とあるが、こちらは表記通り第八十三段の注釈がなされ、二枚目の最後は、第八十三段の本文の途中までとなっている。この二枚の紙の部分を、現状の片桐本本体(差し替えられた結果)と照らすと、最初は五丁表、最後は八丁裏に対応する。本は袋綴じになっているため、写真④の右頁が八丁裏に当たるが、この最終行に、第八十三段の物語本文の途中「いにしへの事などおもひ出て聞えけり。さてもさぶらひてし」とあって、写真③の左端に一致する。つまりこの二枚と現状の本体の五丁から八丁の四枚が差し替えられたものと見られるのである。紙片に「此式枚を抜て六枚を入べし」とあるのとは枚数が一致せず、不審は残るが、いずれにしても、この二枚が差し替えの元の紙に間違いのないようである。そこで、この差し替え部分をもう少し詳しく見てみよう。



9丁オ

写真④

8丁ウ

文林 四十五号

内卷上、冒頭、第八十四段（八十三）

片桐本、差し替え前の元の紙

伊勢物語内、卷の上

なりひら也。

桓武天皇の皇女也。

京の西の方也。

なりひら也。

むかし、男ありけり。身はいやしなから、母なん、宮なりけり。その母、長岡といふところに住給ひける。子は京

さん里の御奉公也。

心ならず

ひとり子也。宮のはらには此なりひらひとり也。

ふびんといふ心

に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばく得まうでず。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけ

かしの七つとてまうづ

いそぎの事也

り。さるにしはずばかりに、とみのこととて、御文あり。おどろきて見れば、歌なり。

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよく見まくほしき君かな

しかるに也

とく也。しめことぞいふ。

あずななんもしらねばなをくかほの見たき也。

さらぬとはさりのがるゝことのならぬ也。さらぬ別れは死ぬることなり。人のしぬるといふはのがるゝ事のならぬ

もの也。君とは中将をさしていへる也。

片桐本、差し替え後の現状

伊勢物語内の巻の上

京の西の方にあり。

むかし、男有けり。身はいやしなから、母なん宮なりけり。其母、長岡といふ所に、住給ひける。子は京に宮仕しけ

れば、まうづとしけれど、しばく得まうでず。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、しは

とく也。いそぎの事也。

すばかりに、とみの事とて、御文あり。おどろきて見れば歌なり。

老ぬればさらぬ別れのありといへばいよく見まくほしき君かな

むかしといへば、遠き世の事にて、いづれの時としられず。男といへば、誰なるらんもしられず。然れば、昔男と

『勢語通』伝本考

いふは、誰ともしられまじとの詞也。こゝは中将の事と見えたり。平城天皇の御孫なれど、名を顕はさぬ故、身はいやしといへり。もとより中将世にあはねば、官位もひきし。阿保親王は、桓武天皇の御女、伊豆内親王を娶りて、中将を生給へり。故に、母なん宮也といへり。中将の兄弟多けれど、外々は皆さきの腹なり。宮の腹には、中将のみなれば、ひとつ子といへり。さらぬは、不^サ避^ラ也。さけのがるゝ事のならぬをいへり。死ぬるをいへり。人の死ぬるといふは、のがれさる事あたはず、かならずあるものなり。君とは、中将をさしていへり。とし老て、我身は、あすもはからねば、いよくあひ見たきとなり。いよくの字おもく見るべし。

元の紙と差し替え後では、本文の傍注も異なり、特に「老ぬれば」の歌の注がかなり異なる。差し替え後の注釈には、冒頭の「むかし」の語についても注釈され、母伊豆内親王にとっては業平が一人子であったことが詳しく述べられている。

国会本

伊勢物語内卷

むかし、男ありけり。なりひら也。身はいやしな位のいやしき也。ながら、母なん、宮なりけり。其母、長岡といふところにすみ給ひける。桓武天皇の皇女也。子は京京の西の方也。に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばく得まうひとり子也。でず。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり。宮のほらには此業平ひとり也。

さるにしはすばかりに、とみのことゝいそぎのこと也。て、御ふみあり。おどろきてみれば、歌なり。

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよくみまくほしき君かなあすしなんもしれねばなをく貌のみたき也。

文林 四十五号

さらぬとは、さりのがるゝことのならぬ也。さらぬわかればしぬることなり。人の死ぬるといふは、のがるゝこと
 のならぬもの也。君とは中将をさしていへるなり。

懷徳堂本

伊勢ものがたり内の巻の上

通第一

むかし、男有けり。身はいやしなながら、母なん宮なりけり。其母、長岡京の西の方といふ所に、住給ひける。子は京なりひらに宮仕しければ、まうづとしけれど、しばゝくえまうです。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、しはしかるなりすばかりに、とみのことつくみなり。いそぎのこと也ゝて、御文あり。おどろきて見れば、歌なり。

老ぬればさらぬ別れのありといへばいよく見まくほしき君かな

むかしといへば、とをき世のことにて、いづれの時としられず。男といへば、たれなるらんもしられず。しかれば、昔男といふは、たれともしられまじとの詞也。こゝは中将のことゝ見えたり。平城天皇の御孫なれど、名をあらはさぬゆへ、身はいやしといへり。もとより中将世にあはねば、官位もひきし。阿保親王は桓武天皇の御女伊豆内親王をめとりて、中将を生給へり。ゆへに母なん宮なりといへり。中将の兄弟多けれど、外々は皆さきの腹なり。宮のはらには、中将のみなれば、ひとつ子といへり。さらぬは不ス避ヅラなり。さけのがるゝことのならぬをいへり。死ぬるをいへり。人の死ぬるといふは、のがれさる事さくあたはず、必あるものなり。君とは、中将をさしていへり。とし老て、わが身はあすもはかられねば、いよくあひ見たきとなり。いよくの字おもく見るべし。

『勢語通』伝本考

『勢語通』巻、章段番号	懷徳堂本・国会本	片桐本
内巻上、八十二（第八十三段）	御をくりして	御おくりして
内巻上、四十五（第四十六段）	おとこ、いとうるはしき友あり	をとこ、いとうるはしき友あり
内巻上、三十九（第三十九段）	おしみてなげき泣を	をしみてなげき泣を
内巻上、五十八（第五十九段）	たはむれ歌をいひ出せり	たはぶれ歌をいひ出せり
内巻下、七十七（第七十八段）	こゝにさむらはんとまうし給ふ	こゝにさぶらはんと申給ふ

国会本は片桐本の元の紙の注釈と一致し、懷徳堂本は片桐本の差し替え後の注釈と一致する。つまり国会本と片桐本の元の二枚の紙が『勢語通』の古い稿の写しであることが、ここでも確認できるのである。

このように、片桐本はもと国会本同様、古い稿の写しだったが、改稿の進んだ本によって部分的に訂正や差し替えがなされ、校訂作業が行われた形跡が認められる。しかし、写真①のような激しい訂正は九丁裏あたりまでで終わっている。これは、校訂しようとしたもののあまりに訂正が多かったから断念したのか、いかなる事情か、不明だが、これ以降の片桐本は、基本的には古い稿をそのままを保持しているようである。

このように大半は古い稿を留めている片桐本ではあるが、ただし、仮名遣いはその限りではない。というのは、片桐本では仮名遣いが替えられ、歴史的仮名遣いに従っているものが多く見られるのである。その例を掲げると、次のようである。

文林 四十五号

外卷上、四（第四段）	ゆきとむらひけるを	ゆきとぶらひけるを
外卷上、五（第五段）	すへてまもらせければ	すゑてまもらせければ
外卷上、六（第六段）	かみなるさはぎに	かみなるさわぎに
外卷上、十四（第十四段）	家の鳥といふはことほりなり	家の鳥といふはことわり也
外卷下、百六（第一百七段）	身さいわいあらば	身さいはひあらば

このように懐徳堂本・国会本と片桐本で仮名遣いに異同がある。蘭洲の自筆稿本の懐徳堂本と蘭洲の初稿の清書本と見られる国会本が蘭洲の本来の表記のほずであるから、片桐本は書写者によって、書き換えられたものと考えられるのである。

契沖が元禄年間、「和字正濫鈔」^①を刊行するなどして、定家仮名遣いを否定し、平安時代初期の仮名遣いに基づいた新しい仮名遣い、いわゆる歴史的仮名遣いを提唱して以来、江戸時代中期には特に国学者の間で、仮名の表記の見直しが盛んになっていた。儒学者である蘭洲自身には仮名遣いについて拘りはなかったのか、懐徳堂本や国会本は当時の一般的な仮名遣いで書かれている。ところが、その蘭洲の『勢語通』を写した片桐本の書写者は、このような新しい仮名遣いについての学識を持った人物だったと見られるのである。こういう音韻や仮名遣いについての学識が蘭洲周辺にも広がっていたことを窺わせるのである。

五

さて、こうして三本を比較すると、それぞれの伝本の性格が明らかになり、『勢語通』の改稿の様相もかなり見えてきたように思うが、次に『勢語通』の構成についての改稿の過程を明らかにしたい。

そもそもこれら三本は本の綴じ方からして異なる。懐徳堂本では四冊に分かれているが、国会本は三冊、片桐本は二冊である。

懐徳堂本の二冊目の冒頭は次のようにある。

伊勢ものがたり内の巻の下 通第二

この巻の始、禪師のみこは、仁明天皇のみこ、貞教親王は、清和天皇のみこ、融公は、嵯峨天皇のみこ、これ高親王は、文徳天皇のみこなるゆへ、次第してをけりと見えたり。

七十七（第七十八段）

昔、たかきことまうす、女御おはしましけり。うせ給ひて、な々なぬかのみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原のつねゆきといふ人いまそかりけり。……

この冒頭の「この巻の始」という文章は、「内の巻の下」の初めの第七十八段とそれ以下の章段に登場する人物が天皇の皇子であるゆえ、順にそれらの章段が置かれていることを指摘した解説であるが、国会本と片桐本にはこの解説部分はなく、「内の巻の下」の記載もない。しかも、それらの本は、ここで冊が分けられることなく、そのまま前の七十六（第七十七段）に引き続き、七十七（第七十八段）の注釈が書かれている。

文林 四十五号

ここで、懷徳堂本を仔細に見ると、冒頭の説明と七十七（第七十八段）の前後に、紙の継ぎ目があることに気付く。また、一冊目の末尾にも紙を継いだ跡がある。これは、一冊目の末尾と二冊目の第七十八段の始まりが本来、繋がっていたことを窺わせる。つまり、もともと国会本や片桐本のように、第七十七段と第七十八段が続いていたものを、蘭洲がここで冊を分けようとして、この間で紙を切ったものと見られるのである。そして、二冊目の第七十八段の前に、「伊勢ものがたり内の巻の下 通第二」という題を付け、その次に「この巻の始、禪師のみこは、仁明天皇のみこ……」以下の解説を書き加えたのであろう。

ところで、外の巻の上の冒頭だが、懷徳堂本と片桐本には序があるが、国会本にはない。序のある両本も、序は表紙裏の見開き部分に、紙を貼って書かれている。こういう状況から考えると、この序も、もともと外の巻になかったものを、後から書き足したものと見られるのである。⁽¹²⁾

このように、三本の異同を比較すると、蘭洲が改稿を重ねるうちに、内巻、外巻をそれぞれ上下に分ち、その構成を整えて、『勢語通』の形態を確立していった様相が窺えるのである。

六

このように改稿された『勢語通』には、どのような注釈の変化があったのだろうか。ここで、そのいくつかを確認してみよう。

第二十四段（外巻上、二十四）

国会本

といひけれど、男歸りにけり。女、いとかなしくて、しりにたちておひ行ど、えおひつかで、し水のある所にふしけり。そこなりける岩に、小指也。およびのちして書付ける。小指より血を出して也。

片桐本

といひけれど、男歸りにけり。女、いとかなしくて、しりにたちておひゆけど、えおひつかで、清水のある所にふしけり。そこなりける岩に、小指也。をよびのちして書付ける。小指より血を出して也。

懷徳堂本

といひけれど、男歸りにけり。女、いとかなしくて、しりにたちておひ行ど、えおひつかで、し水のある所にふしけり。そこなりける岩に、指より血を出してなり。およびはたゞ指なり。小指といふにあらず。和名抄にて考みるべし。およびのちして書付ける。

『勢語通』伝本考

懷徳堂本を仔細に見ると、「および」と「ち」の右に摺り消した痕跡が見られ、傍注から「小指也」と「小」が削除されて、「指より血を出してなり」が残され、これに「およびはたゞ指なり。小指といふにあらず。和名抄にて考みるべし」の傍注が追加されたものと見られる。つまり、女が岩に「およびのちして」書き付けたという、その「および」を「小指」に限定する説から小指に限らず「指」だとする説に変更し、「和名抄にて考みるべし」としている。蘭洲は細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』などにある「およびは小指也」とする説に従っていたものを、契沖の『勢語臆断』に「およびは指なり。小指にあらず。和名集にいつゝの指の名、皆、何のおよびといへり」とあることなどから、

文林 四十五号

訂正したものと考えられる。中世の古注、旧注での通説が江戸時代に入って見直されていたことに促されての訂正だろうが、『和名抄』に言及して、文献学的、実証的に注解する姿勢を見せている。

また、次の異同は、やはり国会本と片桐本がほぼ同内容だが、国会本は傍注としてあった注を移動させて書いているため、これについては、元の姿を忠実に写していると思われる片桐本と比較しよう。

第五十段（外巻上、四十九）

片桐本

行水にかずかよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

懷徳堂本

行水にかず書よりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

かずかく、かずは数なり。かずくのころなり。しばくといふと同じ。かくは枝などもちて水の上をかきさはくなり。いかほどかきさはきてもとのごとくにてあとの見えぬものなり。ゆへにせんなきことのたとへなり。萬葉十一水の上に数かごとき我命妹にあはんとうけひつるかな。このころも命のたしかなきたとへなり。

懷徳堂本の網掛け部分は摺り消して書き直した痕跡があり、歌の左の行間に、小字で続けて注釈している。読みづら
いので、大きくして掲げると、

片桐本

数かくは萬葉にも見えたり。只文字といふ事と見えたり。然らば、漢字と書てかずとよまるればかくいへる歟。

猶しれる人にたづぬべし。

『勢語通』伝本考

懷徳堂本

かずかく、かずは数なり。かずくのこゝろなり。しばくといふと同じ。かくは枝などもちて水の上をかききはぐなり。いかほどかきさはぎてもものとごとくにてあとの見えぬものなり。ゆへにせんなきことのたとへなり。萬葉十一、水の上に数かくごとき我命妹にあはんとうけひつるかな。このこゝろも命のたしかなきたとへなり。このように、もともと「数かく」を「文字書く」意と解していたものを、後には、「数々」「かきさわぐ」すなわち「何度も何度も掻く」意と見解を替えていることがわかる。この場合、蘭洲が何に基づいて、この説を変更したか不明だが、いずれにしても、蘭洲はほかの文献から得た知識によって考察し、説を改めているようである。

七

ところで、この『勢語通』の奥書には「宝暦元年冬しはす筆を洩庵の南窓にとる」とあって、宝暦元年（一七五二）、蘭洲五十五歳の時には『勢語通』が完成していたことが知られるが、この奥書が国会本と片桐本には内の巻だけに存在し、外の巻には書かれていないのに対し、懷徳堂本には内の巻と外の巻の両方にある。初稿の写しと見られる国会本と片桐本にこの奥書が書かれているということは、宝暦元年（一七五二）には初稿が完成していたのであろう。ただし、国会本と片桐本には、内の巻にしか書かれていないので、この時点では内の巻しか完成していなかった可能性も考えられるが、おそらく、外の巻の終わりまで、宝暦元年に完成していただろう。それは、懷徳堂の門下生で、蘭洲の教えを受けていた加藤景範¹³が『勢語通』に自説を加えた注釈書¹⁴の存在によっても明らかである。

文林 四十五号

この景範の書の奥書には「宝暦二年壬申春」とあって、これは、蘭洲の『勢語通』の奥書に「宝暦元年冬しはす」とある時から数ヶ月も経ていないのである。その内容はというと、国会本や片桐本に極めて近いものである。例として、四章で掲げた冒頭の第八十四段を見てみよう。

むかし、おとこありけり。身はいやしなから、母なん、みやなりけり。其母、長岡といふところにすみ給ひける。なりひら也。
 子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばく得まうでず。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり。位のいやしき也。
業平也。 禁裏の御奉公也。はは桓武天皇の皇女也。
とみ見まひする也。 心ならずも。京の西にあり。
かくのごとくなるにの心也。 いそぎの事。ひとり子也。宮の腹には業平ひとり也。
死をいふ。 あすしぬるもしらねばなをく顔のみたき也。ふびんといふ心也。
 老ぬればさらぬわかれのありといへばいよくみまくほしき君かな

さらぬとは、さりのがるゝ事のならぬ也。さらぬ別は死ぬる事なり。人のしぬるといふは、のがるゝ事のならぬもの也。君とは中将をさしていへる也。業平也。

末尾の「業平也」の注がないだけで、あとはほとんどが国会本（二二頁）・片桐本の差し換え前の本文（二〇頁）と一致する。言い回しに多少の違いがあるくらいで、傍注までほとんど同じである。それに比べて、懷徳堂本（二二頁）の注釈とは随分異なる。つまり加藤景範は蘭洲から、国会本・片桐本の段階の稿（おそらく初稿本）を借りて写し、その本に、ところどころ「景範云」として自説を加えたのである。

このようなことから見ても、やはり『勢語通』の初稿は宝暦元年の十二月には完成していたことが確認できる。そして、蘭洲はその後も改訂の筆を加え続け、懷徳堂本のかたちになって行ったものと見られるのである。

八

このように蘭洲は『伊勢物語』の研究にも熱心だったようだが、それは師弟たちとのやり取りの中でも深められて行った可能性がある。それは、『勢語通』の次の箇所からも窺えるところである。

懷徳堂本

第二十三段（外卷上、二十三）

むかし、いなかわたらひしける人の子ども、井のもとに出て、あそびけるを、おとなに成にければ、男も女も、はぢかはして有けれど、男は此女をこそ得めとおもふ。女はこの男をとおもひつゝ、おやのあはずれども、きかでない有ける。さてこの隣の男のもとより、かくなん。

ある人のいふ、此歌女のきはめて貞心なるに、いかなれば内の巻にとり出でざる。貞心は誠に貞心なれど、おやのあはずれどきかざりしは、人のむすめの正しき道にはかなはず。

ゴシック体で掲げた部分は、国会本や片桐本には存在しない文言で、行間に小さな字で書き入れられている。いわゆる「筒井筒」のこの章段で、女が幼馴染の男と結婚することを願い、親がほかの男と結婚させようとしても聞かないでいたことに関する注である。これについて、蘭洲はある人から、この女が極めて貞心であるのに、何故、内の巻に入れないのかと言われ、これに答えて、親がほかの人と結婚させようとしているのに、それを聞かないのは、人の娘として正しい道とはいえないから、内の巻ではなく、外の巻に入れたということ述べている。まさに儒学者としての教戒的な見解が現れている注である。これが後の稿で書き入れられたことばだということからも窺えるように、蘭

文林 四十五号

洲は初期の段階の『勢語通』を師弟に写させ、それを学んだ師弟から疑問を呈されたのであろう。そこで、稿本にこれを書き加えたものと見られるのである。このように蘭洲が『勢語通』を師弟に読ませていたことは明らかである。先にも記したように、蘭洲は『勢語通』の序文に、「その実事のみをぬき出して、古人の注を用ひ、又みづからの見をくはへ、内の巻と名づけ、我家のいせものがたりとし、ひとつ子のむすめによましむ」と書いているが、決して娘のためだけにこの書を著したのではあるまい。これについては、八木毅氏が「この書を娘のためにだけの著作であつたとしたのは恐らく彼の謙退の辞であつたらう。そのことは本書を読んでゆけば分るところであつて、その頭注、傍注、語釈はどれも彼自身の講義用の書入本を整理して明らかにパブリケイションを予想したものであつたと思ふのである」⁽¹⁵⁾と述べるように、娘のためとしたことばは一種のポーズであり、少なくとも師弟たちに読ませるために執筆していたことは先の例からも明らかである。

また、中井登庵の長男で、蘭洲に師事した中井竹山は「先生講字ノ暇ニ、著述スル事多シ。又ソノ余力ヲ以テ本邦ノ古籍ニ及び、萬葉古今勢源二語等ヲ、詮釈編次シテ、家ニ蔵スル事、数部ニ至」⁽¹⁶⁾ると記している。この言から見て、正規の講義で講じていたとは思われないが、やはり蘭洲が日本の古典籍にも関心を持って、注釈作業に当たっていたことが窺える。懷徳堂では、もともと享保二十年（一七三五）の定約で「講じ申すべき事は、四書五経、其の外、道義の書講談致し、他の雑事講じ候儀、一切無用に候事」とされていたものが後に変化し、宝暦八年（一七五八）の『懷徳堂定約附記』には、「四書五経道義の書のみ講釈いたし、他の雑書講候事、一切無用と申義に候へ共、余力に詩賦文章、或は医術をも心懸候人へ、内証にて講じ聞せ、或は会読いたし、或は詩会文会等致候事は格別の義と存候」⁽¹⁷⁾

『勢語通』伝本考

とあり、漢詩文や医術を講ずることもあるというように柔軟になってきている。この書類の署名の筆頭には蘭洲の名が見え、このような儒学一辺倒ではない懐徳堂の幅広い学問への取り組みが蘭洲によって推進されたものであることが窺える。

本稿で示した『勢語通』の改稿の様相によって明らかのように、蘭洲は漢学に対するのと同様の実証的、文献学的姿勢で、『伊勢物語』の注解にも積極的に当たり、懐徳堂に和学も根づかせる働きを果たしたのである。

注

- 1 五井蘭洲の経歴、事績や懐徳堂については、西村時彦『懐徳堂考』（復刻版、懐徳堂友の会、一九八四年）、「懐徳堂の和学」（『語文』第十輯、大阪大学国文学研究室、一九五二年）、テット・ナジタ『懐徳堂 一八世紀日本の「徳」の諸相』（子安宣邦訳、岩波書店、一九九二年）、湯浅邦弘『懐徳堂事典』（大阪大学出版会、二〇〇一年）によった。
- 2 『勢語通について』（『語文』第十輯、大阪大学国文学研究室、一九五二年）
- 3 以下、引用は、特に断らない場合は懐徳堂本による。また、いずれの本も、引用に際しては、濁点、句読点を補った。
- 4 『勢語通』では、普通本系統の『伊勢物語』の第四十二段に「四十一」の章段番号が付され、それ以降、すべての章段番号がずれている。
- 5 ただし、この分類には、事実か否かという視点での弁別としては矛盾がある。これについては、注2の八木毅氏の論考やジェイミー・ニューハード氏の「色男の更生 ―五井蘭洲による『伊勢物語』注釈活動―」（『伊勢物語 享受の展開』竹林舎、二〇一〇年）に詳しい。
- 6 明治二年に閉校した懐徳堂の学術文化活動を継承、顕彰するために、明治四十三年に設立された懐徳堂記念会によって、懐徳

- 堂所蔵の貴重書が翻刻、刊行された。『勢語通』もその中のひとつとして収められた。
- 7 『伊勢物語古注釈の研究 増訂版』（八木書店、一九八六年）
- 8 懷徳堂本と片桐本については、近く刊行される『伊勢物語古注釈書コレクション』第六卷（和泉書院）に全文翻刻をするので、詳しくはこれを参照されたい。
- 9 いずれの本も、引用に際しては、原則として、底本に付された読点に従って、句読点を付したため、本によって、句読点の付け方が異なる場合がある。
- 10 『勢語通』の引用に際しては、『伊勢物語』の普通本の章段番号の後に、（ ）に入れて、懷徳堂本『勢語通』によって巻名、章段番号を記した。章段番号が「四十二」以降では、一段ずつずれていることは既に言及した通りである。
- 11 元禄八年（一七〇〇）刊行。
- 12 十二頁でも示した通り、この序に続く第一段の注解において、片桐本で見せ消ちの訂正がなされており、片桐本は内の巻同様、外の巻も冒頭部分は新しい稿によって校訂がなされた形跡がある。
- 13 号は竹里。一七二〇～九六年。売薬商で、懷徳堂に学び、後には懷徳堂の学事に尽くすが、有雅長伯に師事し、歌人・和学者としても活躍した。その著作も和歌に関するものが多数あり、『国雅管窺』『和歌虚詞考』『和歌実践集』などは上梓されている。
- 14 国会図書館蔵。『伊勢物語古注釈の研究』（大津有一、八木書店、一九八六年）は、この書を『勢語通註』として掲載している。
- 15 注2に同じ。
- 16 「源語梯弁」（中野幸一「ある源氏語注書の出版騒動―『源語話』と『源語梯』と『源語類聚抄』―」（武蔵野文学45、一九九八年）より引用）「源語梯弁」は、蘭洲没後の天明四年（一七八四）に上梓された『源語梯』が、蘭洲の『源氏物語』注釈書『源語話』の盗刻であるとして、中井竹山がその改訂版に付した文書。
- 17 大阪大学附属図書館ホームページ「電子展示で見る懷徳堂」に掲載の「懷徳堂定約附記」を翻字した。句読点は私に付した。